

平和イメージ尺度の作成

野中陽一朗・蘆田智絵・石井眞治¹

(2009年10月6日受理)

Development of Peace Image Scale

Youichirou Nonaka, Chie Ashida and Shinji Ishii¹

Abstract: The approaches to quest educational value of the peace education have been carried out recently. In the present study, we pointed out that there is lack of a standard scale to define and measure the word of “peace”, and conduct the three investigations for the university students to develop the peace image scale. Study 1 examined factor structures which constitute a peace image and its reliability based on results of the meaning analysis by the association tests of word of the peace. The peace image consisted of “positive image”, “anti-war symbol”, “negative symbol”, and “the teaching materials”. Study 2 refined peace image scale’s items and examined its reliability and validity of peace image scale. Study 3 examined validity of peace image scale from the side of the human mental condition. From the results of the present study, the peace image scale; consists of four factor structure 32 items furnished with reliability and validity was completed. As mentioned above, the use possibility of the peace image scale and an educational suggestion were considered, and future problems were examined.

Key words: peace image, scale development, reliability, validity, peace education

キーワード：平和イメージ，尺度作成，信頼性，妥当性，平和教育

問題と目的

平和という言葉は、戦争防止という安全保障に関する問題として位置づけられることが多かった。しかし、入江（2000）は今日の「グローバル化」社会において、従来の平和についての概念が大きく変わったことを指摘し、積極的な意味での平和、単に戦争がないというだけではなくすべての人々は国境を越えてつながっているという意識を具体化するための組織や仕組みが必要であるとしている。また、植田・町野（2007）は平和そして安全という語の機能的価値が、国家や民族間の紛争解決という文脈から、一人ひとりの人間が持つ多様な背景に対する「寛容」を育成する上で重要であると捉えられるようになったと指摘している。そのため、近年になって、平和に関して学習することによる

教育的価値を問い直す取り組みが実施されるようになってきた。村上（2006）は、世界がグローバル化する中で、平和、人権、環境、開発が相互に関連し、それぞれの問題の解決が重要な課題となっていることを指摘している。そして、平和な社会を維持し形成し続けていくためには、子供たち自身にも平和とは何か、また平和社会形成の方法について考えさせることが望まれていると述べている。つまり、学校現場で行われてきた戦争体験継承による反戦平和教育も重要と考えられるが、それだけでは不十分との認識が広まってきている。平和教育を考える上で、平和という言葉が、従来の戦争がない状態だけを捉えるものではないとすると、平和という言葉に伴うイメージがどのように規定されるのかを明確にする必要があると考えられる。

従来、平和という言葉を対象として行われてきた研究は、平和という言葉の文化間における意味比較、平和という言葉の内包的情緒の意味の検証、そして平和

¹ 比治山大学現代文化学部

を意味する言葉そのものを対象とした連想法による調査といった大きく3つの観点から研究が進められてきた。石田(1968)は、各文化における平和を表わす語の意味比較を行い、日本語の平和が「国内における秩序ある混乱のない状態」と「心のみだされないう状態」とに言葉の意味の重点が置かれていると指摘している。また、田中(1971)はSD法を用いて平和という言葉そのものに含まれる内包的情緒的意味を検証するために世界15の文化における10代を対象に調査を行った。その結果、平和という言葉には、すべてポジティブな価値を有する「望ましい」や「好ましい」という情緒的意味を伴うことが明らかにされている。そして、清水・梅本・永田・森川(1967)は高校生を対象に刺激語の1つとして平和という刺激語の連想調査を行い、平和に「快樂的評価」や「快の感情」を含む因子の因子得点が大きいことを明らかにしている。また、松尾(1983)は大学生を対象に平和に関する連想調査を行い、その結果に基づき平和を構成する意味的要素を明らかにしている。しかし、平和という言葉に伴う概念つまりイメージを明確化し、イメージを構成する各次元を測定する尺度は開発されていない。そのため、平和教育の重要性が指摘される中で、平和という言葉のイメージを測定する尺度を開発することは平和教育の実践を鑑みる点からも意義があると考えられる。

そこで、本研究の目的は、平和という言葉のイメージを測定する尺度が欠如していることから、平和イメージ尺度を開発するために特に以下の2つの問題点を解明するものである。1点目は、松尾(1983)の行った連想調査による平和の意味分析を参考にして、より精緻化した平和に対するイメージ測定が可能な信頼性を伴った平和イメージ尺度を作成することである。2点目は、作成した平和イメージ尺度に含まれる各次元の妥当性を検討することである。

調査1

目的

松尾(1983)の連想調査による平和の意味分析を参考にし、より精緻化した平和に対するイメージ測定が可能な信頼性を伴った平和イメージ尺度を作成する。

方法

調査参加者 H大学に所属する男性116名と女性189名の総計305名(平均年齢20歳8ヶ月)であった。なお、本調査は平和に対するイメージ測定が可能な項目を精緻化し尺度を開発することを目的とするものであるため、調査に多くの時間を要し、かつ調査項目の意味や調査における教示文を明確に理解できる者を対象に行

う必要があった。そのため、大学生を対象として調査を行った。

調査項目 松尾(1983)の連想調査による平和を連想できる1395単語の中から反応度数が5以上の単語に加え、連想調査には含まれていなかったが平和をイメージできると心理学専攻の大学院生5名が協議の上に妥当と判定した単語を加えた、総計200単語の平和イメージ項目であった。

調査項目の選定 評定者20名(男女各10名)が、200単語の平和イメージ項目に対して平和をイメージすることが可能かどうかを二者択一で評定した。平和をイメージできると評定した割合が高い上位100単語を本研究で使用する平和イメージ項目として定めた。

手続き 平和イメージ項目の100単語に対し、「あなたは次の言葉を見て、平和をイメージすることができるかどうか」を5段階評定法(まったくあてはまらない、あまりあてはまらない、どちらでもない、ややあてはまる、とてもあてはまる)によって回答を求めた。実施方法は、講義中に集団での一斉回答方式で行った。

結果と考察

平和イメージ項目の因子構造を明らかにするため、因子分析を行った。まず、主因子法により因子を抽出した。因子数は、固有値1以上の基準を設け、固有値の減衰状況や因子の解釈可能性を考慮して最終的に4因子とした。プロマックス回転により単純構造化を行った結果、各因子の下次元となりえる可能性を考慮し、因子負荷量が全ての因子で.40未満、2因子以上に.40以上の項目を除外し、再度因子分析を行った。最終的な項目と結果をTable 1に、因子間相関をTable 2に示した。なお、因子パターンは男女でほぼ同一であった。

因子1は、平和をイメージするポジティブな情緒的意味やポジティブな名詞を表すような37項目で構成されていたため、「ポジティブイメージ」因子と命名した。因子2は、反戦や非核を象徴する物品や場所を表すような15項目で構成されていたため、「反戦シンボル」因子と命名した。因子3は、核兵器や核被害を象徴するシンボルを表すような14項目で構成されていたため、「ネガティブシンボル」因子と命名した。因子4は、平和教育で行う活動や資料を表すような8項目で構成されていたため、「教材」因子と命名した。

次に、平和イメージの各因子の信頼性を検討するため a 係数を算出した。その結果、「ポジティブイメージ」因子が $a = .98$ 、「反戦シンボル」因子が $a = .92$ 、「ネガティブシンボル」因子が $a = .92$ 、「教材」因子が $a = .80$ であった。そのため、平和イメージの各因子は内的整合性が高く、各因子の信頼性が確認された。

この結果に基づき、4つの下位尺度、計74項目からなる本尺度を「平和イメージ尺度」とした。

調査1の結果に基づくと、平和イメージ尺度を構成する各因子に含まれる項目は包括的なまとまりを有していた。松田（1983）による平和の意味の構成要素を

表わす13グループ相互の位置関係を示したプロット図と比較すると、位置関係の親疎疎遠を精緻化したのではないかと考えられた。また、男女間での因子パターンはほぼ同一であった。そのため、平和に対してある程度男女一致したイメージ構造を有していることが示唆された。

今後、教育現場等において児童・生徒を対象に調査を実施することを考慮し、各因子の項目数の削減と信頼性の再検討による平和イメージ尺度の精緻化および各因子の妥当性を検証することが必要となる。そのため、調査2では、作成した平和イメージ尺度に含まれる各因子の項目数の削減を行い、再度各因子の信頼性を検討した上で、各因子と他の尺度に含まれる各因子との相関関係を算出することで妥当性を検討する。

Table 1 平和イメージ項目と因子分析結果

	各因子 負荷量		各因子 負荷量
	〈ポジティブイメージ〉		〈反戦シンボル〉
優しい	.94	平和記念像	.87
希望	.91	平和公園	.81
未来	.89	千羽鶴	.76
笑顔	.89	広島平和記念資料館	.73
夢	.87	折り鶴	.73
愛	.87	非核三原則	.73
安らぎ	.86	長崎	.70
花	.86	広島	.69
暖かい	.85	長崎原爆資料館	.67
幸福	.83	核廃絶	.63
太陽	.83	戦争放棄	.62
美しい	.82	軍縮	.53
健康	.82	黙祷	.50
家族	.82	ひめゆりの塔	.49
嬉しい	.80	憲法第9条	.44
安心	.79	〈ネガティブシンボル〉	
緑	.79	核兵器	.86
自由	.76	北朝鮮	.85
安全	.75	水爆	.84
虹	.75	戦争	.82
明るい	.72	原爆	.75
音楽	.72	被爆者	.69
海	.72	アウシュビッツ強制収容所	.68
歌	.71	自衛隊	.60
理想	.70	アメリカ	.55
楽しい	.70	はだしのゲン	.54
青空	.69	ピカソ「ゲルニカ」	.50
自然	.69	沖縄	.48
子供	.69	アンネの日記	.43
友達	.68	靖国神社	.43
白	.65	〈教材〉	
好ましい	.64	作文	.69
穏やか	.60	ロシア	.65
田舎	.57	浦上天主堂	.58
願い	.51	ドイツ	.55
公園	.50	オリーブ	.51
オリンピック	.49	教科書問題	.48
		フランク「夜と霧」	.47
		スイス	.46

Table 2 平和イメージ項目の因子間相関

	ポジティブ イメージ	反戦 シンボル	ネガティブ シンボル	教材
ポジティブ イメージ	-			
反戦 シンボル	-.08	-		
ネガティブ シンボル	-.34	.55	-	
教材	.49	.04	-.03	-

調査2

目的

調査1で作成した平和イメージ尺度の項目数の削減と信頼性の再検討による尺度の精緻化および妥当性の検討を行う。

この目的を果たすため、各因子の項目数を適度な量に削減した上で再調査を行い、作成した平和イメージ尺度を構成すると想定される4つの各下位次元に対して信頼性の再検討を行うことで、内的整合性の高さを有した項目数の精緻化を行う。そして、平和イメージ尺度と現在の平和という言葉に伴うイメージと関連すると考えられる他の多面的な行動指標や態度の指標である向社会的行動、軍備の是非、国民意識といった尺度との関連を明らかにすることで平和イメージ尺度の妥当性の検討を行う。

方法

調査参加者 H大学に所属する男性86名と女性140名の総計226名（平均年齢19歳5ヶ月）であった。なお、本調査は平和イメージ尺度に含まれる各下位次元の妥当性の検討を目的とするため、調査に多くの時間を要し、かつ調査項目の意味や調査における教示文を明確に理解できる者を対象に行う必要があった。そこで、

調査1と同様に大学生を対象として調査を行った。

調査内容 ①平和イメージ 松尾(1983)を参考にして大学生を対象に作成した平和イメージ尺度であり、ポジティブイメージ、反戦シンボル、ネガティブシンボル、教材といった4つの下位次元尺度から構成される。なお、本調査において、各下位次元に含まれる項目数を適度な量に精緻化することを行った。具体的には、各下位次元に含まれる項目を各次元において因子負荷量が高い上位8項目から構成されるよう整理した。そのため、平和イメージ尺度は4つの下位次元を伴う合計32項目によって構成された。各項目に対して「あなたは次の言葉をみて、平和をイメージすることができるかどうか」を5段階評定法(まったくあてはまらない、あまりあてはまらない、どちらでもない、ややあてはまる、とてもあてはまる)によって回答を求めた。②向社会的行動 菊池(1988)により作成、標準化された大学生を対象とした尺度であり、1因子により構成され、「列に並んでいて、急ぐ人のために順番をゆずる」などの項目を含む合計20項目であった。各項目は5段階評定法(したことがない、1度したことがある、数回したことがある、しばしばした、いつもした)によって回答を求めた。③軍備の是非 東(1990)により作成された大学生を対象とした尺度であり、1因子により構成され、「少々国の予算をふやしても国をまもるだけの軍備は必要である」などの項目を含む合計9項目であった。各項目は5段階評定法(非常に賛成、賛成、賛成とも反対ともいえない、反対、非常に反対)によって回答を求めた。④国民意識 唐沢(1994)により作成、標準化された青年から成人を対象とした尺度であり、国家的遺産への愛着、愛国心、国家主義、国際主義といった4つの下位次元尺度から構成され、「日本の若者は日本の歴史や遺産に敬意を払わなければならない」などの項目を含む合計27項目であった。各項目は5段階評定法(反対、どちらかといえば反対、どちらでもない、どちらかといえば賛成、賛成)によって回答を求めた。

調査の手続きと調査の実施 講義中を利用し、集団での一斉回答方式により実施した。調査参加者は全ての調査内容を含んだ質問紙が配布された後、質問紙全てに回答するよう求められた。いずれも2009年5月の間に実施された。

結果と考察

各下位次元に含まれる項目の内的一貫性の検討 平和イメージに含まれるポジティブイメージ、反戦シンボル、ネガティブシンボル、教材といった各下位次元、向社会的行動、軍備の是非、そして国民意識に含まれる国家的遺産への愛着、愛国心、国家主義、国際主義

といった各下位次元に関して、それぞれ α 係数を算出した。その結果、「ポジティブイメージ」が $\alpha = .95$ 、「反戦シンボル」が $\alpha = .91$ 、「ネガティブシンボル」が $\alpha = .93$ 、「教材」が $\alpha = .80$ 、「向社会的行動」が $\alpha = .83$ 、「軍備の是非」が $\alpha = .84$ 、「国家的遺産への愛着」が $\alpha = .77$ 、「愛国心」が $\alpha = .81$ 、「国家主義」が $\alpha = .69$ 、「国際主義」が $\alpha = .64$ であった。平和イメージ尺度を構成すると想定される4つの各下位次元に対しては項目数を削減した上で行った α の算出においても内的整合性が高く、各因子の信頼性が確認された。一方、平和イメージ尺度との妥当性を検討するための他の既存の尺度に対しても、全体として内的整合性を示していることが明らかにされた。そのため、逆転項目は逆転した上で、各調査参加者における各下位次元尺度項目の平均得点を算出し、それを尺度得点として以下で行う相関関係を検討する分析において使用した。

妥当性の検討 平和イメージに含まれている4つの下位尺度と、向社会的行動、軍備の是非、そして国民意識に含まれている4つの下位尺度との間のPearsonの積率相関係数を算出した。その結果を表にしたものがTable 3である。

Table 3 平和イメージ尺度と他尺度とのPearsonの積率相関係数

	平和イメージ			教材
	ポジティブ イメージ	反戦 シンボル	ネガティブ シンボル	
向社会的行動	-.047	-.056	.140*	-.048
軍備の是非	-.102	.014	.052	-.117
国家的遺産への愛着	.056	.139*	.029	.144*
愛国心	.026	.097	.026	.167*
国家主義	.111	-.063	-.089	.148*
国際主義	-.039	.058	.052	.019

注) * $p < .05$

Table 3から明らかなように、「ポジティブイメージ」因子は、どの尺度との間にも有意な相関が認められなかった。一方、「反戦シンボル」因子は、「国家的遺産への愛着」因子($r = .139, p < .05$)と有意な正の相関が認められた。「ネガティブシンボル」因子は、「向社会的行動」因子($r = .140, p < .05$)と有意な正の相関が認められた。そして「教材」因子は、「国家的遺産への愛着」因子($r = .144, p < .05$)と有意な正の相関、「愛国心」因子($r = .167, p < .05$)と有意な正の相関、「国家主義」因子($r = .148, p < .05$)と有意な正の相関がそれぞれにおいて認められた。

「反戦シンボル」と「国家的遺産への愛着」との相関に関しては、「反戦シンボル」が日本に特有の物品

や場所を表すものであったことから相関関係を説明できる。また、「ネガティブシンボル」と「向社会的行動」との相関に関しては、「ネガティブシンボル」が核兵器や核被害のようなネガティブな側面をイメージできるものであったことから、より思いやりのある感性のようなものと類似し、そのことがこの相関関係をもたらすことに繋がったのではないかと考えられた。この点に関しては、「向社会的行動」と加藤・高木（1980）の情動的共感性尺度に含まれる「感情的温かさ」との間に正の相関が、「感情的冷淡さ」との間に負の相関が認められた（菊池，1988）ということからも説明できるのではないかと考えられた。そして、「教材」と「国家的意識への愛着」、「愛国心」、「国家主義」との間におけるそれぞれの相関に関しては、「教材」が平和を学習する上で行う活動や日本に主眼が置かれた資料を表すものであったことからそれぞれの相関関係を説明できる。したがって、平和イメージに含まれる下位次元尺度である「反戦シンボル」、「ネガティブシンボル」、そして「教材」の3つに関しては外的基準との相関関係が明らかになったことから、妥当性を備えていることが考えられた。

他方、「ポジティブイメージ」因子とどの尺度との間にも有意な相関が認められなかったことに関しては、「ポジティブイメージ」そのものが非常に間接的な平和教育の指標となる情緒的意味やポジティブな名詞を表すものであったことから説明ができるのではないかと考えられた。今後は、田中（1971）の平和はすべてポジティブな価値を有する情緒的意味を有するという指摘に基づき、情緒的意味を想起する上で関連すると考えられる指標との相関関係を算出することで妥当性を検討することが必要なのではないかと考えられる。そこで、調査3では、精緻化した平和イメージ尺度に含まれる「ポジティブイメージ」との相関が考えられる既存の尺度との相関を中心に検討し平和イメージ尺度の妥当性を検討する。

調査3

目的

調査2で各因子に含まれる項目を精緻化した平和イメージ尺度を用いて、各因子と他の尺度に含まれる各因子との相関関係を検討することで妥当性を検証する。特に、調査2で他の因子との相関が認められなかった「ポジティブイメージ」因子の妥当性を検証することに主眼を置くものである。

この目的を果たすため、何らかの対象に対してイメージを抱く際に関連すると考えられる人間の精神的

状態という観点からメンタルヘルスの状態との関連を明らかにすることで、平和イメージ尺度に含まれる各下位次元の妥当性の検討を行う。

方法

調査参加者 H大学に所属する男性74名と女性92名の総計166名（平均年齢20歳8ヶ月）であった。なお、本調査は平和イメージ尺度に含まれる各下位次元の妥当性を検討することを目的とするものであるため、調査に多くの時間を要し、かつ調査項目の意味や調査における教示文を明確に理解できる者を対象に行う必要があった。加えて、先行して行った2つの調査における調査対象者との整合性を考慮したため、調査1および調査2と同様に大学生を対象として調査を行った。

調査内容 ①平和イメージ 調査2で精緻化した平和イメージ尺度であり、ポジティブイメージ、反戦シンボル、ネガティブシンボル、教材といった4つの下位次元を伴う合計32項目によって構成されたものである。各項目に対して「あなたは次の言葉をみて、平和をイメージすることができるかどうか」を5段階評定法（まったくあてはまらない、あまりあてはまらない、どちらでもない、ややあてはまる、とてもあてはまる）によって回答を求めた。②メンタルヘルスパターン 橋本・徳永(1999)が橋本・徳永・多々納・金崎・菊・高柳（1990）のストレス・チェック・リストの改良とともに、QOL尺度としての生活の満足感を追加し、ネガティブな尺度とポジティブな尺度を含めることで作成、標準化された20歳以上の大学生および社会人を対象とした尺度である。そして、下位次元は7因子により構成され、「心配ばかりしている」などの項目を含む合計35項目であった。各項目は4段階評定法（全くそんなことはない、少しはそうである、かなりそうである、全くそうである）によって回答を求めた。

調査の手続きと調査の実施 講義中を利用し、集団での一斉回答方式により実施した。調査参加者は全ての調査内容を含んだ質問紙が配布された後、質問紙全てに回答するよう求められた。いずれも2009年7月の初旬に実施された。

結果と考察

各下位次元に含まれる項目の内的一貫性の検討 平和イメージに含まれるポジティブイメージ、反戦シンボル、ネガティブシンボル、教材の各下位次元、メンタルヘルスパターンに含まれるこだわり、注意散漫、疲労、生活の満足感、対人回避、対人緊張、睡眠障害・起床の各下位次元に関して、それぞれ α 係数を算出した。その結果、「ポジティブイメージ」が $\alpha = .92$ 、「反戦シンボル」が $\alpha = .94$ 、「ネガティブシンボル」が $\alpha = .94$ 、「教材」が $\alpha = .84$ 、「こだわり」が $\alpha = .86$ 、「注

意散漫」が $\alpha = .84$ 、「疲労」が $\alpha = .87$ 、「生活の満足感」が $\alpha = .82$ 、「対人回避」が $\alpha = .85$ 、「対人緊張」が $\alpha = .83$ 、「睡眠障害・起床」が $\alpha = .85$ であった。これにより、全体として内的整合性を示していることが明らかにされた。そのため、各調査参加者における各下位次元尺度項目の平均得点を算出し、それを尺度得点として以下で行った相関関係を検討する分析において使用した。

妥当性の検討

平和イメージに含まれている4つの下位尺度と、こたわり、注意散漫、疲労、生活の満足感、対人回避、対人緊張、睡眠障害・起床に含まれている7つの下位尺度との間のPearsonの積率相関係数を算出した。その結果を表にしたものがTable 4である。

Table 4 平和イメージ尺度とメンタルヘルスパターンとのPearsonの積率相関係数

	平和イメージ			教材
	ポジティブイメージ	反戦シンボル	ネガティブシンボル	
こたわり	-.027	-.132	.015	.100
注意散漫	-.115	-.077	.193*	.022
疲労	-.155*	-.044	.227**	.010
生活の満足感	.167*	-.004	-.117	.034
対人回避	-.097	-.100	.073	-.039
対人緊張	-.139	-.195*	.056	.094
睡眠障害・起床	.017	-.089	-.066	.046

注) ** $p < .01$ * $p < .05$

Table 4から明らかなように、「ポジティブイメージ」因子は、「疲労」因子($r = -.155, p < .05$)と有意な負の相関、「生活の満足感」因子($r = .167, p < .05$)と有意な正の相関が認められた。一方、「反戦シンボル」因子は、「対人緊張」因子($r = -.195, p < .05$)と有意な負の相関が認められた。「ネガティブシンボル」因子は、「注意散漫」因子($r = .193, p < .05$)と有意な正の相関、「疲労」因子($r = .227, p < .01$)と有意な正の相関が認められた。そして「教材」因子は、どの尺度との間にも有意な相関が認められなかった。

「ポジティブイメージ」と「疲労」との相関に関しては、身体的ストレスが高い場合にはポジティブな側面をイメージしづらくなることが示唆された。「ポジティブイメージ」と「生活の満足感」との相関は、双方がポジティブな側面を備えていることに基づくためと考えられた。「反戦シンボル」と「対人緊張」との相関に関しては、社会的ストレスのような緊張状態が高い場合、シンボルをイメージしづらくなるのではないかと考えられた。「ネガティブシンボル」と「注意散漫」あるいは「疲労」との各相関は、「ネガティブ

シンボル」が核兵器や核被害のようなネガティブな側面をイメージできるものであったことから、注意散漫や疲労のようなストレスと類似し、相関関係に繋がったのではないかと考えられた。一方、「教材」因子とどの尺度との間にも有意な相関が認められなかったことに関しては、「教材」が平和教育で行う活動や資料を表すものであったため、人間の精神状態であるメンタルヘルスとは直接的な関連がみられなかったのではないかと考えられた。これらの結果から、「ポジティブイメージ」、「反戦シンボル」、「ネガティブシンボル」は外的基準との相関関係が明らかになったことから、妥当性を備えていると考えられた。

総合考察

本研究では、近年の平和教育に対する教育的価値を問い直す取り組みが実施されていること、それに付随して平和という言葉のイメージを規定し測定する尺度が欠如しているという問題点を指摘し、平和イメージ尺度の開発を行った。具体的には、調査1において、平和という言葉の連想調査による意味分析の結果を参考に、大学生を対象にした調査を行い、より精緻化した平和イメージを構成する因子構造の検討および信頼性の検討がなされた。その結果、信頼性を備えた「ポジティブイメージ」、「反戦シンボル」、「ネガティブイメージ」、「教材」といった4つの下位次元から構成され74項目からなる平和イメージ尺度を作成した。続いて、調査2において、調査1で作成した平和イメージ尺度に含まれる項目数の削減を踏まえた精緻化および平和という言葉に伴うイメージと関連すると考えられる多面的な行動指標や態度の指標との関連を明らかにすることにより妥当性の検討がなされた。その結果、項目の精緻化がなされ、信頼性と妥当性を備えた4つの下位次元から構成され32項目からなる平和イメージ尺度がもたらされた。そして、調査3において、調査2で各因子に含まれる項目を精緻化した平和イメージ尺度とイメージを抱く際に関連すると考えられる人間の精神状態であるメンタルヘルスの状態との関連を明らかにすることにより妥当性の検討がなされた。因子構造、再度の信頼性および妥当性に関する各種検討から、平和イメージ尺度は、4因子構造32項目であり、測定の信頼性を有し、学生個人における平和に対するイメージを規定する構成要素および平和イメージを測定することが示された。最後に、平和イメージ尺度の利用可能性と今後の課題について考察する。

Nevo & Brem (2002) は、平和教育プログラムのために必要ないくつかの側面を提唱し、プログラムで

使用される教授アプローチに様々な方法があることを明らかにしている。そのため、本平和イメージ尺度を平和教育実践での効果測定に用いることにより、どのような方法が平和イメージを構成するとの下位次元を育成するために有効であるのかを検証でき、平和教育プログラムの評価および平和教育プログラムの改善に貢献することが期待できる。また、Nevo & Brem (2002) は平和教育のプログラムの目的の観点の中で、向社会的スキルや多文化主義の向上や自民族中心主義の減少などを挙げており、この観点に該当するであろうと考えられる既存の尺度との関連が本平和イメージ尺度にはみられているため、この点からも利用可能性を提唱することができる。

今後の課題として、以下の2点が挙げられる。すなわち、1つ目は、平和イメージ尺度による評価を用いた様々な学校における教育実践の必要性である。現在、平和教育の重要性が指摘されており、世界唯一の被爆国である日本、特に広島県や長崎県では平和教育の実践が盛んであることが示されている。そのため、各学校の様々な平和教育の目的を達成するための手法を鑑み平和イメージ尺度による効果検証を進めることが課題として考えられる。加えて、得られた結果を援用し、各学校で行われている有効な平和教育実践の視点を獲得していくべきであろう。2つ目は、平和イメージ尺度の汎用性についての研究の必要性がある。例えば、小学校・中学校・高等学校・大学にそれぞれ所属する学生といったように対象を広げた利用可能性の検討が課題である。これにより、各発達段階に沿った平和イメージの構造を明らかにすることができ、平和教育に対する新たな視点となる発達心理学の研究領域においても示唆に富む知見となるであろう。

【付 記】

本研究は広島大学同窓会ドリームチャレンジ賞の助成を受けて行ったものの1部である。

【謝 辞】

本研究を行うにあたってご協力いただいた大学生の皆様には深く感謝を申し上げます。また、終始研究に協力してくださった広島大学大学院教育学研究科の池上正樹さんと柿坂佳代さん、そして広島大学教育学部の明賀裕紀さんに感謝致します。

【引用文献】

- 橋本公雄・徳永幹雄・多々納秀雄・金崎良三・菊幸一・高柳茂美 (1990). 運動によるストレス低減効果に関する研究 (1) -SCL 尺度作成の試みと運動実施者のストレス度の変化 健康科学, 12, 47-61.
- 橋本公雄・徳永幹雄 (1999). メンタルヘルスパターン診断検査の作成に関する研究 (1) -MHP 尺度の妥当性と信頼性- 健康科学, 21, 53-62.
- 東正訓 (1990). 現代大学生の社会的態度構築に関する研究 社会心理学研究, 5, 1-11.
- 入江昭 (2000). NHK 人間講座 戦争のない世紀のために (放送教材) 日本放送出版協会.
- 石田雄 (1968). 平和の政治学 岩波書店.
- 唐沢穰 (1994). 日本人の国民意識の構造とその影響 日本社会心理学会第35回発表論文集, 246-247.
- 加藤隆勝・高木秀明 (1980). 青年期における情動的共感性の特質 筑波大学心理学研究, 2, 33-42.
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する一向社会的行動の心理とスキル 川島書店.
- 松尾雅嗣 (1983). 連想調査による「平和」の意味分析 IPSHU 研究報告シリーズ 8, 1-61.
- 村上登司文 (2006). 平和形成法の教育についての考察-中学生の平和意識調査を手がかりに- 広島平和科学, 28, 27-44.
- Nevo, B., & Brem, Iris. (2002). Peace Education Programs and the evaluation of their effectiveness. In Salomon, G., & Nevo, B. (Ed.), *Peace Education: The concept, principles, and practices around the world.* (pp.271-282) Mahwah, NJ: LEA.
- 清水御代明・梅本亮夫・永田照子・森川弥寿雄 (1967). 連想法による意味の分析 日本心理学会モノグラフ 5 東京大学出版会.
- 田中靖政 (1971). 現代日本人の意識 中央公論社.
- 植田隆子・町野朔 (2007). 平和のグランドセオリー 序説 ICU21世紀COEシリーズ 第1巻 風行社.
(主任指導教員 森 敏昭)